

平成 22 年 6 月 5 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19592574
 研究課題名（和文） 精神障害者の地域生活における‘Empowerment’のあり方と援助の方向性
 研究課題名（英文） A method with ‘Empowerment’ in the area life of the mental disorder person and the aim of help
 研究代表者
 守村 洋（MORIMURA HIROSHI）
 札幌市立大学・看護学部・准教授
 研究者番号：50285540

研究成果の概要（和文）：

国内や先駆的な海外の福祉国家における精神障害者のセルフヘルプ・グループ、精神障害当事者個人の power、セルフヘルプ・グループの empowerment、そしてそれらを支援する家族や専門職者のあり方について、現象学的アプローチ及びエスノグラフィーを用いて明らかにした。今後の精神障害者の自立と支援を発展するための基盤を作成することができた。

研究成果の概要（英文）：

The following point was cleared by using the phenomenological approach and ethnography ; the self-help group of the mental disorder person in Japan and the welfare state of the foreign countries, power of the mental disorder person concerned individual, empowerment of the self-help group, the method with the family who supports them, and the profession person. The base to develop could be made the independence of the mental disorder person and the support.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：精神障害者、セルフヘルプ・グループ、empowerment、すみれ会、エスノグラフィー、精神保健福祉

1. 研究開始当初の背景

精神障害者への処遇に関する歴史は世界的に古く、20世紀半ばの向精神病薬の発見まで

は、精神障害者は「狂人」の名を与えられ、鎖につながれ幽閉され、さらに世の中に浸透する差別・偏見・スティグマ（烙印）などか

ら排除され続けてきた。近年の病院中心の精神医療から地域精神医療保健の時代への変化の中で、ようやく当事者参加の現代へと進んできた。

同様の歴史をたどりながらも、我が国における精神医療保健は、現在、極めて特殊な状況におかれている。絶対数（33万床）でも人口比（1万人に対し29床）でも最大の精神病棟を有し、精神病院中心時代となっている。さらに平均在院日数が1年を越えるなど入院期間が長いことも特徴とされる。それでも精神保健福祉法改正や障害者自立支援法などの制度改革の流れを受け、病院医療から地域医療保健へ少しずつ歩んでいる現況がある（厚生労働省、2004）。

このような背景により、精神障害者を巡る状況はさまざまな変容を呈してきた。最近の注目すべき動向は、精神障害者自身が従来の「客体的立場」から「主体的立場」に成長してきたことである。つまり精神障害を抱えた当事者が発言をし始め、セルフヘルプ・グループが結成され、実際に地域で活動していることである。

従来、精神障害者はその疾病特性により、「…出来ない人」という障害概念に押し込まれた power-lessな存在として位置づけられ、「生活のしづらさ」（Wing、1978）を抱えながら生きてきた。その後、精神障害者の生活に焦点をあてた研究は徐々に増えてきているが、今なお、精神障害者やセルフヘルプ・グループのpowerに関する研究は少ない（L. M. Gutierrez & R. J. Parsons、1998）。

研究者は、精神障害者に潜在的に存在する健康面に注目し、従来の障害部分を通じて健康部分を見ているというアプローチを「ゆで卵」理論として構築し、そのなかで、精神障害者自身の生き方、障害受容、セルフヘルプから生じるpower等、精神障害者による内部からのpowerの存在を明らかにした。これより、精神障害者を取り囲む側からの抑圧・排除と当事者側からそれに立ち向かうpowerという対極性が導かれ、その対極性の矢印がぶつかっている面に、セルフヘルプ・グループがempowermentを発揮していることが示した（守村、2001）。

このpower・empowermentを解明するために、セルフヘルプ・グループを形成する当事者個人の語り（narrative、story）を分析した。結果として、病気との出会い、病いの体験、精神医療に対して、精神病および障害を負ってからの人生などに絡めて存在する希望や苦悩などがpowerに関連していることを考察した（守村、2003）。

2. 研究の目的

我が国では、このpowerを駆使して生活している実態が、医療者を含む「世の中」において、社会復帰や社会参加という言葉に集約されているといえる（蜂矢、1991）。しかし、他文化におけるセルフヘルプ・グループの当事者のpowerのありようは異なり、当事者やその周りに存在する支援者、家族、世の中全体のもつ抑圧やpowerも異なる。当事者がpowerをもって「社会参加・社会復帰」に向けて働きかけようとしている今日、その活動や当事者のempowermentを支える専門職者は、当事者個人や組織をどう支援したら良いのか、また、活動を支え障害者の地域生活を支援することで当事者のpowerをいかに「世の中」が強いている「社会参加・社会復帰」に向けて消耗しすぎずに生活できるのか、そして、今後支援者としてどうあるべきかを検討することが切に求められてきている。

本研究では国内や先駆的な海外の福祉国家における精神障害者のセルフヘルプ・グループ、精神障害当事者個人のpower、セルフヘルプ・グループのempowerment、そしてそれらを支援する家族や専門職者のあり方について、現象学的アプローチ及びエスノグラフィーを用いて明らかにし、我が国の状況と比較し、今後の精神障害者の自立と支援を発展するための基盤とする資料を作成することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究はエスノグラフィー、現地調査・インタビュー、分析を進めていった。

エスノグラフィーの具体的方法として、原則週に1度平日の半日（3～4時間）を基盤セルフヘルプ・グループに身を置き、参与観察を行った。定期観察以外にも例会やイベントにも参加し、多様な状況のもとでの精神障害者セルフヘルプ・グループを描写した。

現地調査（視察およびインタビュー）では研究の趣旨の説明と合意を研究対象当事者の所属するセルフヘルプ・グループに事前に趣旨を説明した。組織の合意を得られた後、研究対象当事者に対し口頭と書面を用いて説明し署名による承諾を得た。本研究の趣旨に対して同意を得られた研究対象当事者、研究対象家族、研究対象専門職に対しインタビューを行った。インタビュー内容は、セルフヘルプ・グループに携わる思いや考え、これまでの経緯やこれからの展望・期待などである。なお、本人の実名を掲載することを強く主張している当事者は、実名で標記している。

収集したデータは理論的サンプリングを行い、仮説構成体や理論萌芽をつかみ取っていた。その過程を経て分析カテゴリーを析出し、仮説を生成した。

4. 研究成果

(1) セルフヘルプ・グループ「すみれ会」

北海道札幌市内で 1970 年から活動を展開している北海道最大の組織力をもつ精神障害セルフヘルプ・グループ「すみれ会」でのフィールドワーク（参与観察）を主として行い、基盤セルフヘルプ・グループを考察した。定期観察以外にも例会やイベントにも参加し、多様な状況のもとでの精神障害者セルフヘルプ・グループを描写した（エスノグラフィ）。月 3～4 回の定期観察以外のフィールドワークの日程および内容を下記に示す。

日程	内容
2007. 4. 9	スタッフミーティング
2007. 4. 21	すみれ例会
2007. 4. 27	すみれ理事会
2007. 5. 27	すみれ例会
2007. 6. 29	道回連打合せ
2007. 7. 28	すみれ海水浴
2007. 8. 25	すみれ例会
2007. 9. 16	すみれ祭
2007. 11. 17	さっぽろ・こころの健康まつり
2007. 12. 22	すみれ忘年会
2008. 2. 16	すみれ例会
2008. 3. 3	すみれ・ひなまつりコンサート
2008. 3. 29	我らが主張大会
2008. 4. 24	すみれ理事会
2008. 6. 1	すみれ総会
2008. 7. 6	道回連総会
2008. 7. 7	すみれ臨時理事会
2008. 8. 7	フィールドワーク
2008. 8. 18	フィールドワーク
2008. 8. 20	すみれ理事会
2008. 8. 21	フィールドワーク
2008. 8. 23	すみれ例会
2008. 9. 12-13	ぜんせいれん
2008. 9. 21	すみれ祭
2008. 10. 4	我らが主張大会
2008. 10. 16-17	すみれ一泊旅行
2008. 10. 20	フィールドワーク
2008. 11. 1	さっぽろ・こころの健康まつり
2008. 11. 13	インタビュー
2008. 11. 21	フィールドワーク
2008. 12. 18	フィールドワーク
2008. 12. 23	すみれ忘年会
2009. 1. 23	山崎氏へのインタビュー
2009. 1. 24	すみれ例会
2009. 2. 7	我らがフリートーク
2009. 2. 21	すみれ例会
2009. 3. 7	我らが主張大会

2009. 3. 30	すみれ映画上映会「ふるさとをください」
2009. 4. 25	すみれ例会
2009. 4. 27	すみれ理事会
2009. 5. 30	すみれ総会
2009. 6. 27	すみれ例会
2009. 7. 25	ふれあい・ハッピーサマーフェスティバル
2009. 9. 19	すみれ祭
2009. 11. 21	さっぽろ・こころの健康まつり
2009. 12. 14	フィールドワーク
2009. 12. 23	すみれ忘年会
2010. 1. 7	フィールドワーク
2010. 1. 23	すみれ例会（結婚式）
2010. 2. 13	すみれ例会（結婚式）
2010. 3. 19	すみれ理事会

これらのフィールドワークから、「すみれ会」というセルフヘルプ・グループの機能と役割を抽出・分析した。久保・石川（1998）の理論に基づいて、グループ・プロセス、ヘルパー・セラピー原則、体験的知識、グループ・ダイナミクス、Empowerment の視点から考察した。

1970 年に山崎（旧姓. 横式）多美子氏を中心として 4 人でスタートしたすみれ会は、40 年の歴史の中で常に当事者主体を重要視しながら、200 名余の会員数を擁するセルフヘルプ・グループへと成長・発展して来た。他のセルフヘルプ・グループ同様、専門職による関与もあった。ただその専門職が表舞台には登場して来ない。様々な専門職者が、つかず離れずにすみれ会を見守って来た。そのなかで会員等に、自分自身の問題や悩みについての理論的根拠（枠組み）を与え、グループでそれらの問題を扱う方法のための理論的根拠を提示しながら「すみれ会」というセルフヘルプ・グループが歩んで来たのである。また、人は援助することで最も援助を受けるというヘルパー・セラピーの原則を体験的に修得して来た。それがセルフヘルプ・グループに代表される消費者参加の強調や、体験的知識の特性と結びつくことで、ヒューマン・サービスにおける援助を再構築し、援助がより人々のニーズに合致した形で自己増殖し、そのなかで人々が power を獲得していく精神が増大していくプロセスを支え、推進していく power となり得る。

「すみれ会」は毎月例会を開催している。その場は普段の作業や憩いの場ではなく、自分自身が自由に表現できる場と変わる。語る内容は病気のこと、現在の生活のこと、家族・親のこと、将来のことなど、多種多様である。その語りに対して、自分の体験的知識を用いて返している。体験的知識は精神の病

いという体験に見舞われ、身体・精神を含めてその人の全体が巻き込まれ、しかも、その病いの体験を生き抜くプロセスを通じて獲得されるものである。体験的知識は、そうした意味でのその病いの体験への全体的参加なしでは決して得られないという点で絶対的な意味を持つ。もちろん専門職には有していない。体験的知識は、具体的であるがゆえ、独自性を持ち限界もあると同時に、多少とも共通の問題を抱える他者の体験を代表（描写）するものである。こうした体験的知識は、体験そのものから生じる、体験それ自体への、問題解決や技能を反映したものである。その体験的知識を活用して会員等が相互に援助し合うことで、「すみれ会」としてのヘルパー・セラピーを行って来たのである。

会の法人化、会員による役員交代、会員の結婚、会員の脱会など日々悩みが絶えない「すみれ会」ではあるが、「すみれ会」の活動は、問題を抱えていること自体が他者の問題解決の一部となる点、会員の自尊心や援助を受ける能力を高める点、援助が自己増殖していくプロセス等に注目し、会員等が活動を通じて力を得（empowerment）、セルフヘルプの精神（the Self-Help Ethos）を醸成することを通じて、これからも歩み続けていくであろう。

(2) 比較対象となったセルフヘルプ・グループ

比較対照するために、北海道内、北海道外、海外のセルフヘルプ・グループを調査した。精神障害者セルフヘルプ・グループの活動概略を把握すると同時に、参加者の発言から精神障害当事者の power と考えられる部分を、抽出・分析した。

①北海道内のセルフヘルプ・グループ

毎年、精神障害者社会参加促進研修会、北海道精神障害者回復者連合会総会に参加した。北海道精神障害者回復者連合会（通称、道回連）は、研究初年度（2007年度6月20日）、52団体1,134名により組織されている。「すみれ会」（札幌市、238名）、「回復者クラブどんぐりの会」（浦河町、90名）が大きなセルフヘルプ・グループだが、ほとんどは10名前後の小規模のセルフヘルプ・グループである。その中で道回連加盟の「すずらんクラブ」（釧路市、45名）、「プラタナス会」（函館市、15名）、「和の会」（七飯町、10名）、十勝精神障害者回復者クラブ連合会（通称、「勝連」）を視察調査し、北海道内の精神障害者セルフヘルプ・グループを比較した。選択の

理由は、「すずらんクラブ」と「プラタナス会」は、会のメンバーが精神障害者社会参加促進研修会のシンポジストを行っていており、自分達が所属するセルフヘルプ・グループについて語る事ができると判断したからである。また、「和の会」は最近、専門職（保健師）が設立に関与した経緯があるためである。そして「勝連」は、1994年に、道回連加盟の「帯広たまり場」（帯広市、8名）、「レモンクラブ」（同市、26名）、「エンジェル会」（同市、9名）が人権擁護をスローガンに連合体となった経緯があり、近年では独自にピアカウンセリング事業を行っていることからである。

いずれのセルフヘルプ・グループに共通して言えることは、会のリーダーの高齢化であり、次世代に引き継ごうにも対象者に恵まれていないことである。「すずらんクラブ」ではリーダーの負担を分かち合うために、毎年リーダーを含めた役員を交代しながら会を運営しているが、3～4年に一度はリーダーの役目が輪番となる。「プラタナス会」では10年間継続してリーダーを担っている。「和の会」では、調査時リーダーの体調が崩れ休会状態であり、専門職が会の維持を担っている。「勝連」では2名が交代でリーダーを担っている。比較的若いメンバーが加入することもあるが、就職を目指して脱会し長続きしないのが現状である。また、いずれのセルフヘルプ・グループも発足時には専門職が関与しており、現在も必要時には専門職（主としてソーシャルワーカー）に依存する傾向が見られた。

また、他団体の交流、助成金受給のための運動やピアカウンセリングなど精神障害当事者の power と思われる発言を聞くことができた。

②北海道外のセルフヘルプ・グループ

「すみれ会」と同時期の1969年に発足した「あすなろ会」（神奈川県）の小坂氏へのインタビュー調査をした（2008.11.29）。1967年に初声荘病院内の患者会で発足し小坂功氏により地域で展開された。当初から「すみれ会」との交流があり、1975年には全国的な当事者交流会が「全国精神障害者社会復帰活動連絡協議会」として開催された。その後、「ブルーライト横浜大会」に関与し、その成功に自信をつかみセルフヘルプ・グループのリーダー達が連合会づくりに向かい、1993年にその全国組織である全国精神障害者団体連合会（通称、ぜんせいれん）と結成した。小坂氏は山崎氏らと共に全国組織に手掛け

たことを誇らしげに語って切れた。今後のセルフヘルプ・グループに期待することとしては、原点に還ることと声を出すことであると強調して語っていた。

③ 国外のセルフヘルプ・グループ

社会福祉先進国であるフィンランドの精神保健福祉関係者および精神障害当事者への聞き取り調査を行った(2007.8.14-22)。ヘルシンキ市委託で精神保健協会運営の「コイブラホーム」(2005年設立)では19人の急性期の当事者が社会復帰を目指しており、当事者のpowerを引き出そうとするスタッフの関わりがみられた。また、精神障害リハビリテーションに関わる社会資源も豊富な地域精神保健体制であった。ニエミホーム財団のグループホームでは、当事者から生活の満足感を聞くことができた。また、当事者の自立を促進するキャリア・ヴァイニオ青少年自立支援ホームを視察し、当事者の生き活きとした姿を観察することができた。

(3) 障害を抱える家族

障害を抱える家族に対しては、すみれ家族会に不規則ではあるが参加し、家族のもつ不安や悩みを聞いた。どこの家族会でも共通した問題が、親なき後の心配であり、家族会悩みを分かち合っていた。

また、札幌市精神障害者家族会連合会主催のもと「精神障がい者が望む精神看護とは」(2009.1.17)、「精神看護の実践」(2009.9.19)を講演し、相談支援を行った。そのうち精神看護の実践をまとめ、援助者からの視点を考察した。

(4) セルフヘルプ・グループに対する専門職の支援のあり方

「すみれ会」への専門職者への関わりに象徴されるように、「つかず離れずに」がセルフヘルプ・グループへの支援のあり方であることが分かった。すみれ会のリーダーは「援助者は歌舞伎の黒子になって欲しい」と言ったり「援助職(専門職)は、田舎の消防車だと思う。普段は出番がなくていいのだ。しかし、火事の時には駆けつかなくてはいけない」と語っていた。「すみれ会」に關与している専門職者は「金魚のフン」と自らを表現しており、金魚(すみれ会)に切れずについていくと表現していた。守村(研究代表者)は「盲目ランナーとその伴走者」というスタンスで「すみれ会」に關与している。いずれにしる、専門職個々によりさまざまなスタンスがあつて良いと思う。ただ重要なのはあく

まで主体は当事者であることを忘れてはいけない。当事者主体を重視しながら、セルフヘルプ・グループから学び続けることが非常に重要である。

また近年、リカヴァリーの理念が浸透しつつある。精神障害リハビリテーションとリカヴァリーとの関連を探究するため、リカヴァリー全国フォーラムに参加し、カンザス大学社会福祉学部チャールズ・ラップ教授から助言を頂いた。それを受けて音更リハビリテーションセンターで実際にWRAP(Wellness Recovery Action Plan)を行っている当事者にインタビューした。障害を抱えながら生きていくことでリカヴァリーとなる。

リカヴァリーの観点からもセルフヘルプ・グループのempowermentを考察することを、今後の検討していく必要性があることが分かった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

① 守村洋、精神看護の実践、かっこう、査読無、第69巻、2009、4~5頁

〔学会発表〕(計5件)

① 守村洋、精神障害者のセルフヘルプ・活動～セルフヘルプ・グループ連合会主催の主催大会からの分析～、日本精神障害者リハビリテーション学会第16回東京大会(東京)、2008年11月22-23日

② 守村洋、セルフヘルプ・グループ「すみれ会」のエスノグラフィー～リーダー交代に学ぶ精神障害者セルフヘルプ・グループのあり方～、日本地域福祉学会第22回全国大会(京都)、2008年6月14-15日

③ 守村洋、谷本千恵、自立支援法時代の精神障害者地域生活支援～セルフヘルプ・グループとの関わり～、第18回日本精神保健看護学会学術集会(東京)、2008年6月21-22日

④ 守村洋、どっこい俺らも生きている～セルフヘルプ・グループ「すみれ会」の変革期を共にして～、日本精神障害者リハビリテーション学会第15回名古屋大会(名古屋市)、2007年11月21-22日

⑤ 守村洋、精神障害セルフヘルプ・グループのもつエンパワーメント～精神障害を抱えて生きる人達からの「語り」から～、日本質的心理学会第4回大会(奈良)、2007年9月29-30日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

守村 洋 (MORIMURA HIROSHI)
札幌市立大学・看護学部・准教授
研究者番号：50285540

(2) 研究分担者

河村 奈美子 (KAWAMURA NAMIKO)
札幌市立大学・看護学部・助教
研究者番号：50344560

谷本 千恵 (TANIMOTO CHIE)
石川県立看護大学・看護学部・講師
研究者番号：10336604